

[エッセイ]

私たちのドイツ体験

1. 濱 由依：第二の故郷ゲッティンゲン

2004年の夏、初めて私はゲッティンゲンのサマーコースに参加しました。私にとって日本の外へ出るのも初めてだったので、期待と不安でいっぱいでした。そのような思いを胸に旅立ちましたが、この1ヶ月の経験が私のこれからの人生観を変えるとは、この時の私は少しも考えていませんでした。そんな貴重な体験をしてから、3年が経ちました。その内の1年は、派遣留学生としてゲッティンゲンで暮らし、また今年の夏はサマーコースのチューターとして2ヶ月ゲッティンゲンに滞在しました。今ではもう私の第二の故郷となったゲッティンゲンでの経験を、その中でもチューターとしての体験を今回は報告したいと思います。

ゲッティンゲンに行くのは今年の夏で3回目になろうとしていました。街にも慣れ、友人たちも暖かく出迎えてくれたので、不安は一切ありませんでしたが、今回はサマーコースのチューターとして任された仕事がたくさんありました。それを無事に成し遂げられるか、そのような不安が私の中にはありました。私は自分が一番初めにサマーコースに参加したことを鮮明に思い出し、どのような不安があったのか、どのような気持ちで参加していたのか、見つめ直しました。また、今回の参加者の方の不安を少しでも和らげられるようにと仕事に励みました。私の仕事は主に、日本人参加者のお世話ということでしたが、それに加え「日本料理を紹介する」というプログラムもありました。そこでは、様々な国の参加者の方たちと一緒にお寿司を作りました。日本文化を身近に感じてもらい、日本にはどのような習慣があるのか、何が流行っているのか、お寿司を食べながら語り合いました。そんな中で、日本語に興味を抱いた参加者もあり、「いただきます」や「ご馳走様でした」など、簡単な日本語も飛び交っていました。チューターとしての仕事は、参加者の皆さんにフランクフルトで出会ってから、最後の見送りの日まで、参

加者の皆さんのお陰で本当に楽しく、無事に終えることができました。

3年前の夏、全てのことが初めてでドイツ語もままならぬ私は、「いつか絶対、ドイツ語を使っている人々とコミュニケーションをとれるようになりたい。そして、もう一度ゲッティンゲンという街へ必ず戻ってきたい。」そのような思いで1ヶ月のサマーコースを終え、しぶしぶ日本へ帰国したことが、今回チューターをしていてまた鮮明に蘇ってきました。それから、派遣留学生として再びゲッティンゲンの地を踏むことができ、1年という長いようで短い期間を素晴らしい友人たちと過ごすことが出来ました。そのときに出来た友人は、いつしか私の親友となり、今でも2日に1回は連絡を取り合っています。1年の終わりには、「もう2度と会えないかもしれない。当たり前毎日に一緒に過ごしていたのに、明日からはもう簡単には会えない所へ行かなければならない」と本当に辛い別れを経験しました。しかし、人生何が起こるかわからないもので、まさかこんなにも早く再会できるとは皆思ってもいませんでした。私の友人はドイツに限らず、ヨーロッパを始め南米出身が多かったので、皆で集まるのはほぼ不可能に近いと覚悟していましたが、今年の夏、私がまたドイツへ戻ると知った友人たちは、わざわざゲッティンゲンまで足を運んでくれました。今回もう一度再会できたことで、私たちの絆はより深まったような気がします。また、ドイツ・ヨーロッパが私にとってとても身近になったことは間違いありません。「生きている限り、二度と会えないことはないんだ」と、身をもって感じた夏でした。

3年前の「サマーコース」での経験があったからこそ、今の私があると実感しています。また、あの辛い別れを経験したからこそ、今毎日大切に過ごすことが出来ているのだと思います。限りある時間の中で過ごす経験から、時間を大切に使うことを学びました。また、3年前の「サマーコース」で抱いた夢、「ドイツ語でコミュニケーションをとれるようになること、もう一度ゲッティンゲンに戻ってくることを無事果たすことができ、今は新たな夢を胸に日々奮闘しています。「サマーコース」のチューターとして、異国の地での生活をよりよいものにする手助けが出来ていたなら幸いに思います。また、参加者の皆さんが、今年のサマーコースでこれからの人生観が変わるきっかけを何か見つけ出せたなら、これにまさる喜びはありません。

2. 宮下 竜介：独逸留学記

2006年9月、私はドイツのゲッティンゲンにいた。1年前に1ヶ月間ボンの語学学校でドイツ語を勉強して以来、私にとって今回が2度目のドイツ滞在だ。1年間の海外留学は中学生か高校生の頃から思い描いてきたことで、その頃はまさかそれがドイツになるとは思ってもみなかったものの、これから待っているいろんな出来事や人との出会いに胸を躍らせていた。不安もきっとあったに違いないが、それを覚えていないほどだ。

駅から寮の近くまでバスで行き、そこから目の粗い石畳の上を重いスーツケースを引いて歩く途中「なんやこれ、ガタガタでコロコロ壊れるわ…」と嘆きながらも、さっそくドイツを感じたのだった。私の住んだ寮は街の中心に位置し、買い物や大学に行くのにとっても便利なところで、ゲッティンゲンや近くのハン・ミュンデンといったドイツ中部に見られる古い木組みの家々の並びにあった。それらはとても可愛く、テーマパークに迷い込んでしまったような錯覚に陥るほどだ。寮の前にはミヒャエル教会があり、その鐘の音はその後1年間私の朝の合図となった。寮にはドイツ人が半分以上、中国人が数人、ポーランドからの留学生が一人という感じで、インターナショナルというよりは「ドイツ世界」だった。そこでは「日本人が来た」ということで特に何かが変わることはなく、それぞれの普段どおりの学生生活が営まれていた。ドイツでは、留学生が外国人というよりは同じ一人の学生として見られ、良い意味で差別がなく自然だなと感じることがよくあった。それは寮をはじめ、市役所での手続きのときも、銀行口座開設のときも、駅でチケットを買うときも同じで、自分が留学生であることを忘れそうになるほどであった。

ドイツでドイツの学生としてドイツ語で受ける授業は想像通り難しいものだった。宿題が何なのかさえ聞き取れないことが何度もあり、講義でみんなが笑うような場面でも、一人何に笑っているのかわからず悔しく思うこともあった。しかし授業で共同作業などがあるときは大変さの中に楽しさがある。特にフランスから来たPierreと「ドイツの再統合」についての発表準備をしたとき、インターネットなどで情報を探してド

イツ語を四苦八苦して読み、資料を作り、発表の最後の映像として、街で見つけ出した旧東ドイツを象徴する車トラヴァントとアウディの最新車を写真に収め、共に発表に挑んだ。Pierreとはその後も一緒によく学食で食べたり飲みに行ったりと、お互い親友と思える関係を築けた。そのようなときによく「見た目とか言葉とか違ってみんな同じ人間やなあ」と思い、温かい気持ちになったものだ。

留学の素晴らしさは、様々な国から来ている学生とその国の言語（ここではドイツ語）を共通語として話し行動することにあると感じている。それはそれぞれの国のことを知るチャンスであるし、日本のことを知ってもらうチャンスでもある。私は留学で別段立派なことをしてきたわけではないが、友達との時間は大切にしたい。日帰りでの旅行や飲みに行こうと誘われたときに宿題などがあっても、どうにかして断らずに済むことを考えた。友達と一緒にいて話す場は楽しいし、そこからは絶対に何かいいものを得られる確信があったし、実際にそうだった。

ドイツでは日本で感じるのとは違う空気が流れていた。ファミレスとコンビニとパチンコが道の両側に延々と続くのではなく、そこには必要最低限のスーパーマーケットと飲み屋とディスコがあった。年齢に関係なく直接向き合える人間関係があった。5分刻みでやってくる地下鉄に乗り遅れて悔しがらるのではなく、当たり前のようにパーティに1時間遅れてくる仲間達がいた。それが普通だった。ドイツでは時間が少しばかりゆったり流れ、より人間らしい生活リズムだったように思う。

2007年7月下旬、私が再びドイツを去る日がやってきた。その1年間は留学前に考えていたよりもはるかに短いものだった。私のドイツ最後の夜、以前関大で知り合ったMatthiasが „Scheiße…” と囁いたときのことは今でもはっきり覚えている。日本語に直訳すれば「くそ…」となりきれいな言葉ではないが、1年の留学というのは本当に短く、私達が次いつ会えるかわからないことに対しての悔しさみたいなものを感じた。ちなみにMatthiasとはいつか関大前でドイツビールとソーセージの店を開く予定だ。

ドイツ留学を終えて私の何かが変わったのかどうか、自分でも具体的にはわからない。しかし、私が以前より少しはドイツ語を理解し話すことができ、「ドイツに行ってよかった!」と心から思えることは確かだ。

外国語でいろんな人たちと話すことの楽しさを教えてくれ、これからの人生からも切り離すことができないであろう存在、それが私にとってのドイツだ。

3. 竹之内 友希：二回生からのスイス留学

私はスイスのチューリッヒ大学に2006年の夏から1年間、派遣留学しました。大学に入る前からドイツ語圏に留学したいという気持ちがあったので、大学へ入ってからドイツ語を始めて、一回生の秋に留学の試験を受けました。その試験までの半年間にドイツ語の文法と基本単語を暗記して、上回生の人たちと同じ試験をハンデ無しに受けなければならなかったのが本当に苦しかったです。一回生の時のドイツ語I、IIでお世話になった先生に良い文法書を教えて頂き、自分で単語帳や問題集を購入して、毎日電車の中や学校やバイトが終わってから家で勉強しました。授業ではコミュニケーションの授業を取っていたこともあって、大学でのドイツ語の授業スピードは遅く、ほとんど独学でドイツ語を勉強したと言っても過言ではありません。そして、留学にはもちろんお金があるので、目標1年もしくは1年半で100万円と設定して、特に授業数が多い一回生でありながら、アルバイトと大学の勉強、ドイツ語の勉強を両立させて頑張りました。今まで生きて中で一番栄養ドリンクを摂取して、痩せた時期でもあります。特に夏休みには問題集1日何ページと1日の目標を立てて、ドイツ語のラジオやテレビを録音・録画し、時間があれば見て、単語テストなるものを簡単に親に作ってもらったこともあります。今となっては、自分でもよくそんなに頑張れたなと思います。そのおかげで、テストは思いのほか簡単に解けてしまい、逆に少しショックだったことを覚えています。幸運なことに試験に合格、留学が決定し、その知らせを聞いたときは努力が実ったと泣きそうになりました。

しかし、もちろん試験に合格することがゴールではありません。留学したのが二回生の秋からなので、1年半のドイツ語力なんてたかが知れています。しかも、私はドイツ語をちゃんと話したことが1度もありま

せんでした。そんな私がすぐにドイツ語を話せるようになるわけもなく、スイスに入る前に通った1ヶ月間のドイツのコンスタンツでの語学コースやスイスの大学での2週間の語学コースでは本当に悪戦苦闘しました。周りを見れば、もちろん私よりドイツ語を上手く話せる人がたくさんいるので、できるだけ周りを見ないように努力しました。周りと自分を比べて落ち込んでも仕方がないので、少しの上達でも喜びを感じるようにして、マイペースにドイツ語を少しずつ上手くなっていこうと心がけました。留学先がスイスということもあり、ドイツで話されているドイツ語とは異なるので友達が普通に話す言葉すらも聞き取れず、スイス人に標準ドイツ語を話してもらってもまだなままっているので、そのなまりに慣れるのも苦労しました。大学の授業は特に専門用語も多数出てきますし、毎週の宿題もドイツ語の言語学の本を30~40ページ読んでくるというものでした。授業では聞こえた単語をノートにメモして、調べて、わからなかったらクラスメイトに聞いて助けてもらい、ドイツ語の本も最初は毎日1日中、本を読んでやっと読み終わるというスピードだったので、コツコツとわからない単語は小さい紙に書いて箱に入れて、またわからなかったらそれを見てという作業を繰り返していきました。地味な作業でしたが、結果的に自分にとってとてもプラスになったことだと思います。私の通っていたスイスのチューリッヒ大学では、本気で勉強しにきている学生しかいないので、座るところがあればみんな本を開いて勉強していました。授業でも学生が主体で、先生は学生に助言を与える程度でした。周りの温かい支えやそういった周りのモチベーションの高さもあって、その授業は合格し単位を取得することができました。

また、留学する前から思っていたことは、ただの「語学留学」にしたくないということ。日本に帰ってきて、ただドイツ語が少し上手くなりましたただけでは、お金の無駄であり、悔しいとずっと思っていました。だから、環境問題にも興味があったので、自分なりに友達に聞いて、気づいたことをメモしたり、卒論のテーマにしようと思っているスイスドイツ語に関しても、できるだけそれに関する授業も受けて、関連のある本も買いました。勉強以外にも、友人が主催するエイズのコンサートのお手伝いをしたほか、特に面白かったことは、日本のアニメや漫画の

フェスティバルにボランティアとして参加したことでした。思った以上に、漫画やアニメの影響を受けて、日本に興味を持ってきている外国人が多く、日本人であること、日本文化を誇りに思いました。

この留学を通して、2年半でここまで頑張りきれたことはすごく大きいものだと思っています。自分自身に自信もつきましたし、もっと新しいことにチャレンジしていきたいという気持ちも生まれました。もちろんここで終わるのではなく、留学を通して得たことを次につなげて、それに関連した何かをやっていけたらなと考えています。

4. 福田 美穂：留学体験記

友達に見送られながらゲッティンゲンの駅を去ったあの日から、早くも4ヶ月が過ぎた。再び関西大学の学生として慌しい日々を過ごす中、ふとドイツでの日々を思い出すことがある。私にとってのゲッティンゲンという街は大学生活の思い出が詰まった場所であり、桃源郷のような存在だ。留学以前に2度参加したサマーコースでは、初めて自分の目を通して見るドイツに心躍らせ、毎日が冒険のようであった。必ず合格してここに戻ってくると友達に誓い、挑んだ交換留学の試験。無事に受かったと知ったときの喜びは今でも忘れられない。

長年の夢が現実となり、不安と期待に胸を膨らませながら日本を発つてからの1年間は、数え切れないほどの新しい経験と出会いの連続、そして数年が凝縮されたかのような密度の濃い日々であった。ドイツ語によるビザの取得に住民登録、銀行口座の開設、学校手続き……どれも初めてのことで、悪戦苦闘しながらもなんとか全てを乗り切った。あれこれ迷っている暇などない、「当たって砕けよ」の精神である。いざとなった時の人間の底力は計り知れないものがあり、伝えようとする意志と度胸があればなんとかなるものなのだ。友達と良い関係を築くためにも、最も大切なのは伝えようとする気持ちで、うまく話せないからといって尻込みばかりしては何も始まらないのだと知った。友情や思いやりの心は全世界共通であり、強い意志は言葉の壁を越せると確信している。心を通わせたいから、自分の考えを伝えたいからこそ、外国語を学

ぶ。こんな当たり前のことを忘れ、ただ義務的に外国語を学んでいた昔の自分が今はとても恥ずかしい。外国語を学ぶ本当の意味を今更ながら気付けたことは、私がこの1年で得た価値あるものの1つなのかもしれない。

日本に戻ってきて数ヶ月が経った今だからこそ、言えることもある。何年も前から望んでいた留学生活だったはずなのに、ドイツに来たことを後悔して苦しんだ時もあった。私が以前から追いつけていたもう1つの夢が崩れ去り、授業以外のドイツ語学習に全く専念出来ない日が続いたのである。残念ながら、現在ではドイツ語を使って働ける場はほとんどなく、求められるとしても英語運用能力ばかり。違う道を選ばなくてはならなくなった今、人より1年も長く大学生活を送ってまでドイツ語を学ぶ意味などあるのだろうか……そんなことを考えてしまっていた。交換派遣留学生として送り出して頂いたのにも拘わらず、このような期間があったことを本当に申し訳なく思うと同時に、当時の弱い自分を恥じずにはられない。

そんな状況から脱することが出来たのは、留学で得るべきものは語学力ばかりではないと気が付いた時だった。ゲッティンゲンという、世界中から学生たちの集まる大学街だからこそ得られるものが多いことに気付いてからの留学生活は、実に有意義なものへと変わった。長期休みを利用して、ヨーロッパ各国を旅し、友達の実家で家族の一員のように生活をさせてもらったこと。そして留学生同士、お互いの国について話したり、料理を作りあって文化を伝えたりしたこともあった。日本にいた間は、漠然としかわからなかった外の国の真の姿に触れ、いかに自分が表面的な部分しか見ようとしていなかったのかを思い知ったのである。社会問題や教育問題について話すこともあったのだが、ドイツ人学生や他国からの留学生の母国に関する深い知識にはいつも圧倒されっぱなしだった。ここで学んだこと、それは「自国を知らずして他国は学べない」ということだ。日本人学生として、日本を知らずに平然と生きていくということの愚かさを痛感し、日本の政治や経済にも関心を持つようになったのである。今まであまり日本人と関わったことがないという人たちにとって、私のような留学生は代表のようなものだ。少しでも日本という国について知ってもらい、身近に感じてもらうことが留学期間中の

私の使命となっていく。そして、真の国際交流をはかるため、もっとドイツ語も話せるようになりたいと願うようになり、受動的だった私の学習に対する姿勢が確実に変わった。

今の私は、この留学生活が、自分の人生にとってなくてはならない経験だったと胸を張っていえる。ドイツでの1年がなければ、私は狭い世界で狭い視野しか持たずに生きていったのだろう。そして、こんなにも数多くの素敵な友達に出逢うことはなかった。今なお、たくさんの友達がメッセージをくれて、いつでも訪ねておいでと言ってくれる。忙しさの中でくじけそうになっている時、遠くの国からの応援メッセージや、みんなの一生懸命学んでいる姿や働く姿が私の支えだ。ドイツやいろんな国の友達が出来たことで、私の人生の楽しみが何倍にもなったように思う。昔よりも、世界がずっと近くに、そして身近なものに感じられる。彼らと繋がりつづけていくためにも、私は生涯ドイツ語を学び続けていきたい。いつか世界中の友達と再会し、ドイツ語で思い出話に花を咲かせること。そして、自分の子供や孫、近所の子供達に語学を教えること。これが留学を終えた私の、今後の人生に掲げる新たな目標、そして叶えたい夢である。

5. 笠井 稔之：私費留学体験記（2006-2007）Würzburg Universität

あれは、ちょうど一昨年の今頃だっただろう。私は、今日は何日かという日常的に生活していて気になることさえも気にしてなかった。いや、気にする余裕も無かったというべきだろうか。関西大学留学制度の交換派遣員のテスト結果が出て、自分は周りの友達においてかれたような気持ちになっていた。この時、学校を1年休学してまで私をドイツに絶対に行きたいと思わせたものはWM（Weltmeisterschaft）、そうワールドカップであった。サッカー好きの私は今ドイツに留学すると、語学はもちろん学べるし、WMまでも見られるのではないかという期待に胸が膨らんだのである。当時この気持ちが無かったら、こんな留学体験記など書いてはいなかっただろう。

そして、私は3月3日、ドイツに飛び立つための準備が整い、ドイツ

に対する大きな期待と、はたまた初めての一人旅、不安いっぱいのおっぼけな男を乗せた飛行機はドイツへと出発したのである。

ドイツに着いた時いきなり大きな試練が私を待ち構えていた。ドイツ人の友達が私を空港まで迎えに来てくれていたのだが、待ち合わせ場所を約束していなかったことを空港についてから気付いたのである。私は、持っていた大きなKoffer（スーツケース）を引きずりながら空港内を歩いた。すると、何分か経ってからアナウンスで „……Toshiyuki Kasai …… Information 14 bitte.“ と聞こえたのである。そこで、片言ドイツ語で周りの人に聞きながら何とか辿り着くと、そこには友達が待っていたのである。あの時は本当に泣きそうになった。20歳になってまで迷子の呼び出しをされるとは誰が予想できただろうか。

このあともドイツでの一年の留学中にはたくさんのトラブルがあったのだがとりあえずここまでにして、自分が何をしていたのか書きたいと思う。私は、結論から言うと一年間ずっとGaststudent（語学を習いに来ている留学生）という身分でいた。まず、3月3日に着きその後3月6日に自分がこれから通うであろう大学付属の語学コースのクラス分けテストがあった。自分はいきなりDSHコースに通うつもりだったのだが、周りの外国人留学生のレベルの高さというか自分のレベルの低さというべきか、いきなり自分の今までの日本での準備を否定されたかのような気持ちになった。私は、日本でしっかり留学の準備としてドイツ語にも取り組んでいた方だと思ったのだが、ドイツに来ると“日本では”などという小さい世界で物を考えていても関係ないと思わされた。そして、私はまず初めの一ヶ月間Mittelstufe（中級ドイツ語段階）というクラスに割り振られ、ここでドイツ語の文法（Passiv, Konjunktiv1,2, Relativsatz）をしっかりと学び始めたのである。クラスは、韓国人が半分ぐらいを占め、残りは、日本人、中国人、カメルーン人、フィリピン人、イタリア人、フランス人、スロベニア人など本当に国際色豊かなメンバーだった。今思うと、この初めのクラスがとても楽しかったことが、この後の1年間の留学が本当に楽しいものになったこととつながっていたのかもしれない。そして、無事この一ヶ月間のコースを終え早くも春休みを迎えたのだ。私は、その時に出来た友達と色々な町を旅行したり、買い物に行ったりなどして本当に毎日が楽しくて仕方が無かつ

た。この時期には、まだ自分が言いたい事の30%ぐらいしか言えなかったにもかかわらず、お互いの母国語でない言語で笑いあい、感動していたことを私は今でも鮮明に思い浮かべる事が出来る。また、春休みはあつと言う間に過ぎ夏学期が始まったのだ。私は、ここでも Mittelstufe で勉強し少人数の授業だった。ここで、また新たな友達と出会い、授業ではドイツの歴史や、地理、自分達の国についての発表など外国人のためのいろんな授業が用意されていた。その結果、このコースを終えた頃にはすでにある程度話したい事も言えるようになってきていた自分がいた。そして、すでに気付いていたことではあったが、学校ではドイツに来たのにドイツ人の学生と知り合う場がなかった。どうしたらよいかと悩み、ドイツ人学生が楽しむ娯楽の一つ、Discoに行ったのである。すると、たちまちいろんな学生と出会い、出会うたびに高原（フランクフルトにあるサッカーチームに所属している日本人選手）や、安倍（元総理）などと言われ日本というとサッカーと総理なのかといろいろ気付かされた。これは、私達がドイツというとビールとソーセージというのと同じだろうと思った。このようにとても濃い半年が過ぎた。この頃、自分の目標であった試験DSHが近づいてきていることを忘れてしまうほど楽しかったのだ。

DSHというのは、外国人が大学に入学するための必要最低限のドイツ語力を見る試験である。DSH 1、2、3と合格の中にもレベル分けがあり、これはドイツに1年留学する日本人の多くが目標にする、ドイツ語能力を測る一つの日安だ。そして、結果はDSH 1に合格した。これは、残念ながら違う地域の大学には入学することが出来たのだが、私が留学したところでは少し足りなかった。私は、目標を達成できずに1年を終えることになった。しかし、この時沈んだ私を救ってくれたのは周りにいた友達であった。彼らのおかげで、残りの半年は前半と全く同じように過ごしたのだが、思っていた以上に有意義に過ごせた。

こうして、私の1年間の留学は笑いあり、涙ありで幕を閉じたのである。これから、留学をしようかと迷っている人達に言いたい事がある。留学とは、人生を変える可能性を秘めた冒険である。是非体験して欲しい。

最後にこの場を借りて、留学の際に手伝っていただいた先生方、先輩方に改めて心から感謝いたします。ありがとうございました。